

花菖蒲の促成栽培——8年間の研究とその成果

鳥取県 東伯郡琴浦町 山脇信正

1. はじめに

促成栽培の研究は、8年前平成13年(2001年)に始まり、平成31年「花菖蒲の室内栽培法」、33号「花菖蒲の室内栽培法」(その2)、35号「花菖蒲の室内栽培法」(その3)にこれまでの研究内容が掲載されています。これまで年々開花時期を早めてきました。

2008年度の実験で12月24日に開花させることに成功しました。この研究の目標としていた元日の開花を2週間も早めることができました。この8年間の研究と成果をまとめました。

2. 研究の動機

この研究の動機となったのは、11年前(1998年)の3月、清水弘氏からご自身が作出された早咲き品種の苗が送られてきたことです。これらの品種が入るまでは、わが家の花菖蒲の観賞期間は、5月下旬から6月下旬の約1ヶ月余りでした。それ以来、一気に半月延びました。このことをとても不

思議に思いこれらの品種を土台にして促成栽培が可能になれば、もっと花の観賞期間を延ばすことが出来ると考えました。

もう一つの動機は、8年前(2001年)の冬、町内の方から「庭の花菖蒲の葉が枯れないで(休眠しないで)青々しているがなぜですか。」という質問があったことです。

翌日の夜、その方の庭の様子を見せて頂きました。その夜は、小雪の舞うとても寒い夜で、明々と点灯している常夜灯の下で青葉の茂った花菖蒲を暫く見ていました。その夜の庭の情景が、後にそのなぞを解く大きなヒントになりました。

現在、日本には5500品種以上日本花菖蒲協会に登録されています。こんなに多くの品種があるのに、花の観賞期間は僅か1ヶ月余りと極めて短い。せめて半年くらい花を楽しめればどんなにすばらしいことかと考えました。

3. 花菖蒲の特性(生理的現象)

小雪の舞う夜、常夜灯の下で

青々と茂っていたあの夜、の情景から、「室内になんらかの条件を設定して、休眠をさせないで生育させることが可能になれば、真冬にでも花を咲かせることが出来る。」という仮説をたてました。そこで、次の2点に注目しました。そこで、
○明々と点灯している常夜灯
—日照(電照)
○小雪の舞う寒い夜
—気温(室温)

【花菖蒲は長日性植物である。】
(特性1)
長日性植物は、日照時間が一定の長さになると生長を始める。

【花菖蒲は耐寒性植物である。】
(特性2) 耐寒性植物は、寒さに強く0℃位まで枯れずに生長する。これらの花菖蒲の特性(生理的現象)を生かし、冬の日照不足と気温の低下を電照と加温で補って、春の陽気を感じさせる室内の環境づくりを考えました。

4. 室内の環境づくりと日常の栽培管理

栽培管理

花菖蒲が休眠している12月、1

月、2月は、一年で最も日照時間が短く気温も低い時期です。この時期に春の陽気を感じさせる室内環境を如何にしてつくるかが、この栽培の大きなポイントです。

(1) 昼間の鉢の置き場所と室温
昼間は、日当たりのよい窓辺に置く。昼間の日光は大切です。昼間の室温は18℃〜23℃。

(2) 夜間の室内照明と室温
(就寝中は無加温・無照明)
日没から就寝まで蛍光灯を点灯。真冬の日照不足を補うために極めて大切。夜間の照度は300ルクス、室温は18℃〜23℃。

(3) 朝方の室内照明と温度
目覚めた時から夜明けまで蛍光灯を点灯し、ストーブで加温する。朝方の照度は300ルクス、室温は18℃〜23℃。

(4) 水の与え方 (水は大切)
受け皿に常時水がたまっている状態にする。根腐れの心配は全くない。

(5) 肥料
この時期は肥料を与えない。

(6) 株元をスッキリさせて観賞
花菖蒲の魅力の一つは、剣状の葉にある。生育の過程で枯れ葉や折れた葉が出来る。これらを取り除いて株元をスッキリさせて観賞する。(写真1)

5. 年度別の実験記録と結果

春の陽気を感じさせる室内環境の下で、年度別に実験を行いました。

◎2003年度

12月27日 休眠期に入った鉢を室内に取り入れられました。1週間位で新芽がはじめました。5月5日の「端午の節句」、室内に取り入れ後130日で開花しました。

◎2004年度

12月10日 前年度より17日早く休眠期に入った鉢を室内に取り入れられました。

4月下旬に開花。室内に取り入れ



(写真1) 日当たりのよい窓辺に置く

た後110日位から咲き始めました。

◎2005年度

12月1日 前年度より更に10日早く休眠期に入った鉢を室内に取り入れられました。

3月3日「桃の節句」、室内に取り入れてから110日で開花しました。

*2003年度から2005年度までの実験の結果から新芽が伸びはじめ約110日で開花することが明らかになりました。

◎2006年度

11月10日 新しい試みとして、未だ青葉が茂っている時期に葉を刈り取り室内に取り込みました。結果、前年(2005年度)より約1ヶ月早く2月5日に「若桜」が開花しました。

この年の実験は、今までの花菖蒲栽培の常識からは考えられないことであり、花菖蒲の生理的現象を究明する新しい発見でした。

◎2007年度

2006年度の結果から、4期に分けてそれぞれの期に6品種葉刈りを行いました。

以下、【葉刈りした日】(葉刈り後の鉢の置き場所) ↓ 【結果】

◆1期 8月1日

(室内取り入れまでは日当た

りの良い屋外に) ↓ 開花せず

◆2期 9月16日

(室内取り入れまでは日当たりの良い屋外に) ↓ 1月18日開花

◆3期 9月25日 (室内取り入れまでは日当たりの良い屋外に) ↓ 2月1日開花

◆4期 10月6日 (葉刈りと同時に室内へ) ↓ 2月15日開花

*葉刈りした鉢は10月に入った室内に取り入れ、照明と加温を開始した。

6. 研究の壁

私の町の秋祭りの日でした。近所の方と拙宅の芝庭で酒宴を開いていました。その席で一人の方が、庭の鉢植えを見ておられて「ああ、そうか花菖蒲は、今ごろから芽を出すのだ。」とつぶやかれた。そのつぶやきを聞き、その鉢を見ると株元から小さな芽が数本でていました。私は今までそのことに気が付きませんでした。友人のその言葉が心に残り頭から離れなかった。これらの芽は、冬に向かつてどうなるのだろう。

1ヶ月後、いろいろ考えた末「葉が未だ青々している時期(生育の余力のある時期)に葉を刈り取れば、新芽が伸びて生育を続ける。」という仮説をたてました。

この時期に青葉を刈ることは、とても勇気がいる。

「秋のこの時期の葉は、翌年の花芽を充実させるために大事にしなければならぬ。」が花菖蒲栽培家の常識と考えられており、私も長年そのように思っていました。

2006年11月5日5品種(棚田の藤桜、若桜、影法師、雷丘、氷河の鳥)5鉢の青葉を刈りとりました。葉刈り後すぐに室内(サンルーム)に取り入れられました。1週間ぐらいしたら新芽が伸び始め、

これまでの実験と変わらない生育

を続けました。

60日が経過した頃「若桜」に花芽らしい膨らみのある株が見えてきました。100日目には、花茎が立って蕾の先にピンク色が見えてきました。2月15日、110日後に見事に開花しました。前年度(2005年)より1ヶ月早い開花です。これまでの記録を大きく更新しました。今後は、葉刈りの時期を少しずつ早めながら、どの時期まで葉刈りが可能か、その時期を特定することが必要と考えました。

8. この促成栽培で明らかになったこと

- (1) 自然休眠に入る前の葉刈りは、促成栽培には不可欠な作業である。葉刈りの時期を変えられることにより、開花時期が調整できる。
- (2) 昼間は日の当たる窓辺で育てる。日没から就寝までの電照と加温は必要条件である。照度は300ルクス。室温は18℃〜23℃。
- (3) 花菖蒲は0℃位まで枯れないで生育を続ける。
- (4) 葉刈り後およそ110日で開花することが明らかになっ

た。このことから葉刈り後110日を基準にして開花日を特定することが可能になった。例えば、1月30日に開花をさせたい場合は、1月30日から110日さかのぼった前年の10月10日頃に葉刈りをすればよい。

(5) 冬は気温が低いのでゆっくり開花するため花を長期間観賞することができる。

(6) 促成栽培では、室温が23℃以下であるため菌による病は全く発生しない。特に、立ち枯れ病は皆無である。立ち枯れ病の発生と温度(気温)の関係が深いことが判った。今後、菌による病の解決の糸口になると考えられる。

(7) 促成栽培用の鉢の植え付けは、3月〜4月に新芽を株分けして植え付ける。葉刈りする時期までしっかり肥料を与えて、株を太らせることが大切である。葉刈り後、室内に取り入れる9月末まで屋外の日当たりの良い場所です。

(8) 促成栽培に適している品種「江戸系 早咲き種」
(清水弘 作出)

棚田の藤桜、棚田の春、棚田の桜、棚田の夜、棚田の風、棚田の白雪、若桜、火影、乙女峠、

影法師、黒船、夕汐、霞千鳥、雷丘、北国、早野、春の糸、春の園、春の灯、雲居の庭、氷河の鳥、紫頭巾、峠の茶屋、王城、沢の光、黒船、車窓の桜、湖泉、娘船頭、茶の湯、花仙桜、梅林庵、清雅、童画の桜

(加茂花菖蒲園 作出)

深海の星、桜小町、花物語、翠映、初吹雪、初相生、麦秋、初夢、お花畑
(山脇信正 作出)

琴浦桜、琴浦の光、琴浦の誉、琴浦千代、永代の春、蓮浄の雲、平家の光

「肥後系 早咲き種」

(清水弘 作出)

篤姫、嵐ヶ丘、白鹿、荒神、美園、木葉船、御所の入橋、硯川、鏡花
(光田義男作出)

京舞、迎春花、淀君、琴桜、桜乙女
(加茂花菖蒲園 作出)

淡雪桜、朝日の里、紅桜

◎今後は肥後系早咲き種の育種が望まれる。

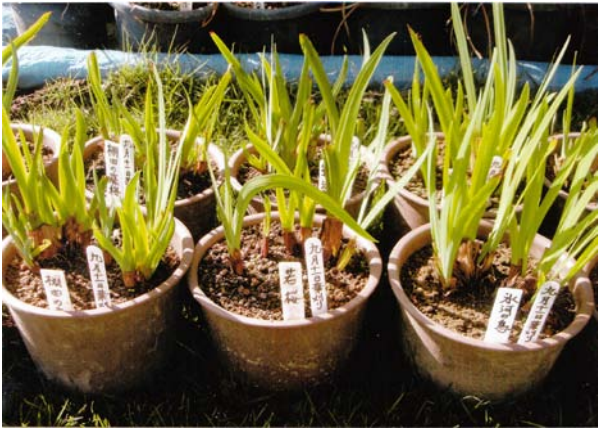
9. おわりに

これまでの研究の結果から、現段階で12月下旬から翌年の6月

下旬までの約6ヶ月余り花が観賞できるようになりました。また、花菖蒲がインドアプラント(室内観賞植物)としての新しい栽培の道も開けてきました。この研究の初期の目標である元日に開花させることに成功しました。

今後この栽培法を普及させていくには栽培経費、栽培管理、等々解決しなければならぬ課題がまだ残されています。全国の仲間によく紹介して実践していただき、お互いに情報を交換しながらより完成した促成栽培法をめざしていきたいと思えます。

最後に、8年間の研究の経過の中で、東京の川村良子様、保田史義様、横内尚子様、横浜市の小串正美様には、私のデータに基づいて実践されて「真冬の開花」に成功されています。その都度、写真や詳細な実践のご報告をいただきご協力いただきました。心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。



室内取り入れまでは屋外の日当たりのよい場所で



9月11日 葉刈り作業



11月1日 葉刈り後50日



10月2日 室内へ取り入れ 電照と加温開始



11月29日 蕾を確認、葉刈り後80日



11月21日葉刈り後70日



12月24日 開花



12月20日 蕾色付く、葉刈り後102日

